

巻頭言 「インマヌエル」

宇野 元

書棚に詰め込んだ小さな CD コレクションには、昔 LP で親しんだのが忘れられずに求めたものがあります。長い付き合いでも、耳をすます頻度はさまざま。一年に一度だったり、大切な思いがあるゆえに何年も置いていたり。よく聴くもののなかにバッハのゴルトベルク変奏曲があります。

さりげなく主題が流れて、変奏がつづく。起伏に富み、ニュアンス豊かに。駆け足で、次はゆっくりと。最後に再び主題が奏でられて終わる。まるで人生のようだと思います。人生が始まり、めくるめくように流れ、終結するよう。

この曲を聴くと、おのずと心に去来するものがあります。別の時の、別の状況で見た二つの映画。スウェーデンの映画監督、イングマル・ベルイマンが作った印象深い白黒作品。神様を信じられない。そんなシリアスな状況の中にこの曲が静かに流れる場面がありました。小学五年生だった次女と見た「時をかける少女」。高校生たちのひと夏の体験。放課後の場面で、この曲が、やさしく、みずみずしく流れます。また、めくるめくように。

ある年の祈祷会での思いがけない出会い。その時ひらかれた聖書の箇所は、創世記第1章1節。講話のはじめに、普段そういうことをしない牧師が、この曲の最初と最後の部分を流しました。それから私たちの歩みに思いを寄せて、はじめに神、終わりに神、途中の部分においても。たとえ、どんな道であるとしても。これをおぼえて信頼して歩むように、と語ってくれました。

2019年の終わりの月。お一人お一人、今、どんなところを歩んでいらっしゃるでしょう。何かに一所懸命な時も、不如意な時も、深い顧みのもとに置かれています。困難な時も、道の先に幸いなゴールが約束されています。変奏曲がちゃんと主題に戻るように。

戻る？ 事柄を正確に表現するなら、道の途中においても、たえず、そして隠れた形であっても、伴われています。変奏は、常に主題とつながっています。どんなに離れるように思えても、神がともにいます。インマヌエル。このことが、私たちの一年の終わりと初めに示されています。